

福澤諭吉の日英同盟論



会長 渡辺利夫

ロシアが日本に対して領土的野心をむき出しにしたのは、日清戦争後の三国干渉により遼東半島の清国への還付を日本に迫った時からであった。不凍港を求めて南下を続けるロシアにとって、渤海湾に突き出すこの半島を日本のものとさせるわけにはいかない。ロシアはフランスとドイツを巻き込んで半島の清国還付を日本に強圧してきたのである。

日清講和条約の成立が明治28年4月17日、その1週間足らず後の23日に3国の公使が揃って東京の外務省を訪れ、本国の訓令としてそれぞれの覚書を手交して帰っていったという。日清戦争で日本が国力を蕩尽させていることを見透かしての共同行動だが、条約調印のわずか7日後の強圧である。何という猛々しさであろうか。

「臥薪嘗胆」復讐を心に誓って辛苦に耐えるしかない。日本は日清戦争で清国から得た賠償金の殆どを注ぎ込み、税負担を一段と加重にして軍事増強に努めた。この苦しみの中にありながら福澤諭吉はひたすらに冷静であり、長期を見据えた大局的な構想力をもって事態を日本に有利に展開させるための方策を思考していた。福澤は同年の6月21日付の『時事新報』に「日本と英国との同盟」を書いた。驚嘆すべきスピード感をもった洞察力だと言わねばならない。ロシ

アという凶暴な軍事大国と抗するには、かの海軍大国イギリスとの連携以外に方途はないと断じたのである。

何故イギリスがかの「光栄ある孤立」を捨てて、日本との同盟関係に入ろうとするか。その動機は何か。福澤の見立てはこうであった。

「英国が是まで同盟を離れたる所以のものは、敢て他国と同盟する其事を避け嫌ふたるに非ず、唯露国南進の防御に就き、世界の強國中、英と利害を同ふする者なきを以て已むを得ず孤立したるのみ。若しも等しく利害を感じて、實力以て相与に共同の敵に当らんと云ふ者あらば、機敏なる倫敦の政府は之を歓迎して、其力を借ることに躊躇せざるや疑を容れず」「我輩をして強ひて云わしむれば、日英同盟に由りて利益を享ることの多き者は、日本よりも寧ろ英国なりと断言するを憚らざる者なり」

この論説が三国干渉開始の直後、日英同盟成立の6年以上も前に書かれたものであることを知るだけでも、国際環境に対する福澤の予見力が驚嘆に値するほど高いものであったことが分かる。福澤は日英同盟締結の必要性を誰よりも早く説くと同時に、外交は利害の共存の上にしか成立しないという徹底したリアリズムを、この一文の中に鮮やかに浮かびあがらせている。